

燈明之卷

泉鏡花

青空文庫

「やあ、やまかがしや蝮まむしが居おるぞう、あつけえやつだ、気をつけさせえ。」

「ええ。」

何と、足あしもと許もとの草へ鎌首かまづみが出たように、立すくみになったのは、薩摩さつまがすり緋ひの単衣ひとえ、藍あいね鼠ずみ無地の紵ろの羽織うゑで、身軽いであに出立いでたった、都会きかららしい、旅の客。——近頃ちかごろは、東京でも地方でも、まだ時季が早いのに、慌いそてもものせいか、それとも値段が安やすいたためか、道中の晴はの麦むぎ稈わら帽ぼう。これが真新しいので、ざつと、年としよりは少すくく見える、そのかわりどことなく人にん体ていに貫目ぬきめのないのが、吃びつくり驚おどろした息もつかず、声を継いで、

「驚いたなあ、蝮まむしは弱よわったなあ。」

と帽子ぼうしの鍔つばを——薄曇うす曇りで、空は一面に陰気いんきなかわりに、まぶしくない——仰あおむ向けに崖がけの上を仰いで、いま野良声のらこゑを放はなつた、崖縁がけのへりにのそりと突立つたつ、七十余ななじゅうごりの爺じいさんを視みながら、蝮まむしは弱よわったなあ、と弱よわった。が、実は蛇へびばかりか、蜥蜴とかけでも百足むかでも、怯おびえそうな、据すわらない腰こしつきで、

「大変だ、よろよろ居るかーい。」

「はああ、ああに、そんなでもねえがなし、ちよくちよく、鎌首をつん出すでい、気をつけさせるがよかんべでの。」

「お爺さん、おい、お爺さん。」

「あんだなし。」

と、谷へ返答だまを打込みながら、鼻から煙を吹上げる。

「煙草たばこせん錢ぐらい心得るよ、煙草錢を。だからここまで下りて来て、草生くさつぽの中を連戻してくれないか。またこの荒墓あれはか……」

と云いかけて、

「その何だ。……上の寺の人だと、悪いんだが、まったく、これは荒れているね。卵塔場へ、深入りはしないからよかつたけれど、今のを聞いては、足がすくんで動かないよ。」

「ははははは。」

鼻のさきに漂ただよう煙が、その頸ぼんのくぼ窪くぼのあたりに、古寺の破やれびさし廂しやうを、なめくじのように這はつた。

「弱え人だあ。」

「頼むよ——こつちは名僧でも何でもないが、爺さん、爺さんを……導きの山の神と思うから。」

「はて、勿体もねえ、とんだことを言うなつす。」

と両つ提の——もうこの頃では、山の爺が喫む煙草がバットで差支えないのだけれど、事実を報道する——根附の処を、独鈷のように振りながら、煙管を手弄りつつ、ぶらりと降りたが、股引の足、拵えだし、腰達者に、ずかずか……と、もう寄つた。

「いや、御苦労。」

と一基の石塔の前に立並んだ、双方、膝の隠れるほど草深い。

実際、この卵塔場は荒れていた。三方崩れかかった窪地の、どこが境というほどの杭一つあるのでなく、折朽ちた古卒都婆は、黍穀同然に雑伏して、薄暗いと白骨に紛れよう。石碑も、石塔も、倒れたり、のめつたり、台に据っているのはほとんどない。それさえ十ウの八つ九つまでは、ほとんど草がくれなる上に、積つた落葉に埋れている。青芒の茂つた、葉越しの谷底の一方が、水田に開けて、遙々と連る山が、都に遠い雲の形で、蒼空に、離れ島かと流れている。

割合に土が乾いていればこそで——昨日は雨だったし——もし湿地だったら、蝮、やま

かがしの警告がないまでも、うつかり一步も入れなかつたであろう。

それでもこれだけ分入るのさえ、樹の枝にも、卒都婆にも、苔の露は深かつた。……旅客の指の尖は草の汁に青く染まつている。雑樹の影が沁むのかも知れない。

蝙蝠が居そうな鼻の穴に、煙は残つて、火皿に白くなつた吸殻を、ふつつつと、爺は掌の皺に吹落し、眉をしかめて、念のために、火の気のないのを目でためて、吹落すと、葉末にかかつて、ほすほすと消える処を、もう一つ破草履で、ぐいと踏んで、

「ようござらつせえました、御参詣でがすかな。」

「さあ……」

と、妙な返事をする。

「南無、南無、何かね、お前様、このお墓に所縁の方でがんすかなす。」

胡桃の根附を、紺小倉のくたびれた帯へ挟んで、踞んで掌を合せたので、旅客も引入れられたように、夏帽を取つて立直つた。

「所縁にも、無縁にも、お爺さん、少し墓らしい形の見えるのは、近間では、これ一つじやあないか——それに、近い頃、参詣があつたと見える、この線香の包紙のほぐれて残つたのを、草の中に覗いたものは、一つ家の灯のように、誰だつて、これを見当に辿りつく

だろーと思うよ。山路やまみちに行暮れたも同然じゃないか。」

碑おもとての面の戒名は、信士とも信女しんによとも、苔に埋れて見えないが、三つ蔦づたの紋所が、その葉の落ちたように寂しく躰あらわれて、線香の消残った台石に——田沢氏——と灰ほのかに読まれた。

「は、は、修行者のように言わっしやる、御遠方からでがんすかの、東京からなす。」

「いや、今朝は松島から。」

と袖を組んで、さみしく言った。

「御風流でがんす、お楽たのしみでや。」

「いや、とんでもない……波は荒れるし。」

「おお。」

「雨は降るし。」

「ほう。」

「やつと、お天気になったのが、仙台からこつちでね、いや、馬鹿々々しく、皈かえつて来た途中ですよ。」

成程、馬鹿々々しい……旅客は、小県おがた、凡杯ぼんはい——と自称する俳人である。

この篇の作者は、別懇の間柄だから、かけかまいのない処を言おう。食い続きは、細々

ながらどうにかしている。しかるべき学校は出たのだそうだが、ある会社の低い処を勤めていて、俳句は好きばかり、むしろ遊戯だ。処で、はじめは、凡俳、と名のつたが、俳句を遊戯に扱うと、近来は誰も附合わない。第一なぐられかねない。見ずや、きみ、やかなの鋭きヒ首あいくちをもつて、骨を削り、肉を裂いて、人性じんせいの機微ぬを剔ぬき、十七文字で、大自しんおう然おの深奥しんおうを衝つこうという意気込の、先輩ならびに友人に対して済まぬ。憚はばかり多い処から、「俳」を「杯」に改めた。が、一盞いっさん献けんずるほどの、余裕も働はたらきもないから、手酌てしやくで済すます、凡杯である。

それにしても、今時、奥の細道のあとを辿たどつて、松島見物は、「凡」過ぎる。近ごろは、ドイツ 独逸フランス、仏蘭西はつい隣りで、マルセイユ、ハンブルク、アビシニヤごときは津々浦々の中に数えられそうな勢いきおい。少し変つた処といえは、獅子狩ししがりだの、虎狩だの、類人猿の色のもめ事などがほとんど毎月の雑誌に表われる……その皆がみんな朝夷あさひな島めぐりや、おそれ山の地獄話でもないらしい。

最近も、私を、作者を訪ねて見えた、学校を出たばかりの若い人が、一月ばかり、つい御不沙汰ごぶさた、と手軽い処が、南洋の島々を渡つて来た。……ピイ、チョコ、キイ、キコと鳴く、青い鳥だの、黄色な鳥だの、可愛らしい話もあったが、聞く内にハツと思つたのは、

ある親島から支島へ、カヌウで渡った時、白熱の日の光に、藍の透通る、澄んで静かな波のひと処、たちまち濃い萌黄に色が変わった。微風も一縷雲もないのに、ゆらゆらとその潮が動く、水面に近く、颯と黄薔薇のあおりを打った。その大き、大洋の只中に計り知れぬが、巨大なるの浮いたので、近々と嘲けるような黄色な目、二丈にも余る青い口で、ニヤリとしてやがて沈んだ。海の魔宮の侍女であろう。その消えた後も、人の目の幻に、船の帆は少時その萌黄の油を塗った。……「畳で言いますと」——話し手の若い人は見まわしたが、作者の住居にはあいにく八畳以上の座敷がない。「そうですね、三十畳、いやもつと五十畳、あるいはそれ以上かも知れなかつたのです。」と言うのである。

半日際とも言いたいほどの、旅の手軽さがこのくらいである処を、雨に降られた松島見物を、山の爺に話している、凡杯の談話ごときを——読者諸賢——しかし、しばらくこれを聴け。

二

小県凡杯は、はじめて旅をした松島で、着いた晩と、あくる日を降籠められた。景色は

雨に埋もれて、竈にくべた生薪のいぶつたような心地がする。屋根の下の観光は、瑞巖寺の大将、しかも眇に睨まれたくらいのもので、何のために奥州へ出向いたのか分らない。日も、懐中も、切詰めた都合があるから、三日めの朝、旅籠屋を出で立つと、途中から、からりとした上天気。

奥羽線の松島へ戻る途中、あの筋には妙に豆腐屋が多い……と聞く。その油揚が陽炎を軒に立てて、豆腐のような白い雲が蒼空に舞っていた。

おかしな思出はそれぐらいで、白河近くなるにつれて、東京から来がけには、同じ処で夜がふけて、やつぱりざんざん降だった、雨の停車場の出はずれに、薄ぼやけた、うどん
の行燈。雨脚も白く、真盛りの卯の花が波を打って、すぐの田畝があたかも湖のように
に拡がって、蛙の声が流れていた。これあるがためか、と思つたまで、雨の白河は懐しい。
都をば霞とともに出でしかど……一首を読むのに、あの洒落ものの坊さんが、頭を天日に
曝したというのを思出す……「意気な人だ。」とうっかり、あみ棚に預けた夏帽子の下で
素頭を敲くと、小梟はひとりで浮かり笑つた。ちよつと駅へ下りてみたくなつたのだそ
うである。

そこで、はじめて気がついたと云うのでは、まことに礼を失するに当る。が、ふとこの

城下を離れた、片原というのは、渠かれの祖先の墳墓の地である。

海も山も、齊ひとしく遠い。小県凡杯は——北ほつこく国の産で、父も母もその処の土となった。が、曾祖、祖父、祖母、なおその一族が、それか、あらぬか、あの雲、あの土の下に眠った事を、昔話のように聞いていた。

——家は、もと川越かわごえの藩士である。御存じ……と申出るほどの事もあるまい。石州浜田六万四千石……船つきの湊みなとを抱えて、内福の聞こえのあつた松平某なにがし氏が、仔細しさいあつて、この片原五万四千石、——遠僻えんぺきの荒地に国がえとなつた。後に再び川越に転封てんぼうされ、そのまま幕末に遭遇した、流転の間に落ちこぼれた一藩の人々の遺骨、残骸ざんがいが、草に倒れているのである。

心ばかりの手向たむけをしよう。

不ふり了りょう簡けんな、凡杯も、ここで、本名の銚せんきち吉きちとなると、妙に心が更あらたまる。煤すすの面つらも洗すすうし、土地の模様も聞こうし……で、駅前たよの旅館へ便たよつた。

「姉さん、風呂には及およばないが、顔かほが洗すすいたい。手水ちようず……何、洗面所を教しえておくれ。それから、午飯おひるを頼たのむ。ざつとでいい。」

二階座敷で、遅おそめの午飯おひるを認しめる間に、様子ようすを聞くと、めぎす場所——片原は、五里半、

かれこれ六里遠い。――

鉄道はある、が地方のだし、大分時間が費^{かか}るらしい。

自動車の便はたやすく得られて、しかも、旅館の隣が自動車屋だと聞いたから、価値^{ねだん}を聞くと、思いのほか廉^{れん}であった。

「早速一台頼んでおくれ。……このちよつとしたものだが、荷物は預けて行きたいと思う。……成るべく、日暮までに帰つて、すぐ東京へ立ちたいのだがね、時間の都合で遅くなつたら一晩厄介になるとして――勘定はその時と――自動車は、ああ、成程隣りだ。では、世話なしだ、いや、お世話でした。」

おもてはしご
表階子を下りかけて、

「ねえさん。」

「へい。」

「片原に、おつこち……こいつ、棚から牡丹餅^{ぼたんもち}ときこえるか。――恋人でもあつたら言^{ことづ}伝^けを頼まれようかね。」

「いやだ、知りましねえよ、そんなこと。」

「ああ、自動車屋さん、御苦労です。ところで、料金だが、間違はあるまいね。」

「はい。」

と恭しく帽を脱いだ、近頃は地方の方が夏帽になるのが早い。セルロイドの目金を掛け
ている。

「ええ、大割引で勉強をしております。で、その、ちよつとあらかじめ御諒解を得ておきた
いのですが、お客様が小人数で、車台が透いております場合は、途中、田舎道、あるいは
農家から、便宜上、その同乗を求めらるる客人がありますと、御迷惑を願う事になってい
るのであります。」

「ははあ、そんな事だろうと思つた。どうもお値段の塩梅がね。」

女中も帳場も皆笑つた。

ロイドめがねを真円に、運転手は生真面目で、

「多分の料金をお支払いの上、お客様がですな、一人で買切つておいでになりましたも、
途中、その同乗を求むるものをたつて謝絶いたしますと、独占的ブルジョアの横暴でも
ありますかのように、階級意識を刺戟しまして——土地が狭いもんですから——われわれ
をはじめ、お客様にも、敵意を持たれますという、何かにつけて、不便宜、不利益であ
ります処から。……は。」

「分りました、ごもつともです。」

「ですが、沿道は、全く人通りが少いのでして、乗合といつてもめつたにはありません。からして、お客様には、事実、御利益になつておりますのでして。」

「いや、損をしても構いません。妙齡としごろの娘か、年増の別嬪べっぴんだと、かえつてこつちから願いたいよ。」

「……運転手さん、こちらはね、片原へ恋人に逢いにいらつしやつたんだそうですから。」
しつぺい返しに、女中にトンと背中を一つ、くらわされて、そのはずみに、ひよいと乗つた。元来おもみのある客ではない。

「へい御機嫌よう……お早く、お帰りにどうぞ。」

番頭の愛想を聞流しに乗つて出た。

惜おしいかな、阿武隈川あぶくまの川筋は通らなかつた。が、県道へ掛かつて、しばらくすると、道の左右は、一様に青葉して、梢こすえが深く、枝が茂つた。一里ゆき、二里ゆき、三里ゆき、思いのほか、田畑も見えず、ほとんど森林地帯を馳はしる。……

座席の青いのに、濃い緑が色を合わせて、日の光は、ちらちらと銀の蝶の形して、影も翼も薄青い。

人、馬、時々飛々に数えるほどで、自動車の音は高く立ちながら、鳴く音はもとより、ともすると、驚いて飛ぶ鳥の羽音が聞こえた。

一二軒、また二三軒。山吹、さつきが、淡い紅に、薄い黄に、その背戸、垣根に咲くのが、森の中の夜があけかかるように目に映ると、同時に、そこに言合せたごとく、人影が頭われて、門に立ち、籬に立つ。

村人よ、里人よ。その姿の、轍の陰にかくれるのが、なごり惜いほど、道は次第に寂しい。

宿に外套を預けて来たのが、不用意だったと思うばかり、小県は、幾度も襟を引合わせ、引合わせしたそうである。

この森の中を行くような道は、起伏凹凸が少く、坦だった。がしかし、自動車の波動の自然に起るのが、波に揺らるるようで便りない。埃も起たず、雨のあとの樹立の下は、もちろん濡色が遥に通っていた。だから、偶に行逢う人も、その村の家も、ただ漂々蕩々として陰気な波に揺られて、あとへ、あとへ、漂って消えて行くから、峠の上下、並木の往来で、ゆき迎え、また立顧みる、旅人同士とは品かわって、世をかえても再び相逢うすべのないような心細さが身に沁みたのであった。

かあ、かあ、かあ、かあ。

鈍くて、濁って、うら悲しく、明るいようで、もの陰気で。

「鳥がなくなあ。」

「群れておるです。」

運転手は何を思ったか、口笛を高く吹いて、

「首くくりでもなけりやいいが、道端の枝に……いやだな。」

うっかり緩めた把手ハンドルに、衝つと動きを掛けた時である。ものの二三町は瞬く間だ。あた

かもその距離の前途ゆくての右側に、真赤まつかな人のなりがふらふらと立揚たちあがった。天象、地氣、草

木、この時に当って、人事に属する、赤いものと言えば、読者は直ちに田舎娘の姨見舞おばか、

酌婦みぢゆきぶりの道行振みちゆきぶりを瞳に描かるるであろう。いや、いや、そうでない。

そこに、就なかんずく中 巨大なる杉の根に、揃つらばって、踞つくばっていて、いま一度に立揚たちあがったのであ

るが、ちらりと見た時は、下草をぬいて燃ゆる躑躅つづじであろう——また人家がある、と可懐なつか

しかった。

自動車はハタと留まって、窓を赤く蔽おほうまで、むくむくと人数にんずが立ちはだかつた時も、

齊ひとしく、躑躅の根から湧わきあが上あったもののように思われた。五人——その四人は少年である。

……とし十一二三ばかり。皆真赤なランニング襦衣で、赤い運動帽子を被っている。彼等を率いた頭目らしいのは、独り、年配五十にも余るであろう。脊の高い瘡男やせおとこの、おなじ毛糸の赤襦衣を着込んだのが、緋ひの法衣ころもらしい、坊主袖の、ぶわぶわするのを上に絡まとつて、脛すねを赤色の巻きゲエトル。赤革の靴を穿はき、あまつさえ、リボンでも飾さまつた状に赤木綿おおいの蔽おおいを掛け、赤い切きで、みしと包んだヘルメット帽を目深まぶかに被かつた。……

頤あごほね骨とがが尖り、頬がこけ、無性髯ぶしょうひげがざらざらと疎あらかく黄味を帯び、その蒼黒あおくろい面色かおいろの、鈎かぎほな鼻が尖つて、ツンと隆たかく、小鼻ばかり光沢つやがあつて蠟ろういろ色に白まなじりい。眦まなじりが釣り、目が鋭く、血の筋が走つて、そのヘルメット帽の深い下には、すべての形容について、角が生えていそうで不気味に見えた。

この頭目、赤せきしよく色の指導者が、無遠慮に自動車へ入ろうとして、ぎろりと我が銚吉を視みて、胸むなさきで、ぎしと骨張むなつた指を組んで合掌した……変だ。が、これが礼らしい。加うるに慇懃いんぎんなる会釈むすぶだろう。けれども、この恭屈頂礼をされた方は——また勿論されるわけもないが——胸むねを引搔ひつかいて、腸はらわたでもむしるのに、引導を渡されでもしたようで、腹はらへ風かぜが徹とおつて、ぞツとした。

すなわち、手を挙げるでもなし、声を掛けるでもなし、運転手に向つてもまた合掌した。

そこで車を留めたが、勿論、拝む癖に傲然たる態度であつたという。それもあとで聞いたので、小梟がぞつとするまで、不思議に不快を感じたのも、赤い闖入者が、再び合掌して席へ着き、近々と顔を合せてからの事であつた。樹から湧こうが、葉から降ろうが、四人の赤い子供を連れた、その意匠、右の趣向の、ちんどん屋……と奥筋でも称うるかどうかは知らない、一種広告隊の、林道を穿つて、赤五点、赤長短、赤大小、点々として顯われたものであらう、と思つたと言うのである。

が、すぐその間違いが分つた。客と、銚吉との間へ入つて腰を掛けた、中でも、脊のひよろりと高い、色の白い美童だが、疝の虫のせいであらう、……優しい眉と、細い目の、ぴりぴりと昆虫の触角のごとく絶えず動くのが、何の級に属するか分らない、折つて畳んだ、猟銃の赤なめしの袋に包んだのを肩に斜に掛けてゐる。且つこれは、乗込もうとする車の外で、ほかの少年の手から受取つて持替えたものであつた。そうして、栗鼠が（註、この篇の談者、小梟凡杯は、兎のように、と云つたのであるが、兎は私が鼯鼠だから、栗鼠にして置く。）後脚で飛ぶごとく、嬉しそうに、匆ねつつ飛込んで、腰を掛けても、その、ぴよん、が留まないはずんでいた。

——後に、四童、一老が、自動車を辞し去つた時は、ずんぐりとして、それは熊のよう

に、色の真黒な子供が、手がわりに銃を受取ると斉しく、むくむく、もこもここと、踊躍して降りたのを思うと、一具の銃は、一行の名誉と、衿飾の、旗表であつたらしい。

獵期は過ぎてゐる。まさか、子供を使つて、洋刀や空気銃の宣伝をするのではあるまい。いずれ仔細があるであろう。

ロイドめがねの黒い柄を、耳の尖に、?のように、振向いて運転手が、

「どちらですか。」

「ええ処で降りるんじや。」

と威圧するごとくに答えながら、双手を挙げて子供等を制した。栗鼠ばかりでない。あと三個も、補助席二脚へ揉合つて乗ると斉しく、肩を組む、頬を合わせる、耳を引張る、真赤な洲浜形に、鳥打帽を押合つて騒いでいたから。

戒は頭われ、しつげは見えた。いまその一弾指のもとに、子供等は、ひっそりとして、エンジンの音立処に高く響くあるのみ。その静さは小県ただ一人の時よりも寂然とした。

なぜか息苦しい。

赤い客は咳一つしないのである。

小梟は窓を開放つて、立続けて巻藁を吹かした。

しかし、硝子を飛び、風に捲いて、うしろざまに、緑林に靡く煙は、我が単衣の紺のかすりになつて散らずして、かえつて一抹の赤氣を孕んで、異類異形に乱れたのである。

「きみ、きみ、まだなかなかかい。」

「屋根が見えるでしょう——白壁が見えました。」

「留まれ。」

その町の端頭と思う、林道の入口の右側の角に当る……人は棲まぬらしい、壊屋の横羽目に、乾草、粗朶が堆い。その上に、惜むべし杉の酒林の落ちて転んだのが見える、傍がすぐ空地の、草の上へ、赤い子供の四人が出て、きちんと並ぶと、緋の法衣の脊高が、枯れた杉の木の揺ぐごとく、すすくすくと通るに従つて、一列に直つて、裏の山へ、夏草の径を縫つて行く——この時だ。一番あとのずんぐり童子が、銃を荷つた嬉しさだろ、う、真赤な大な臀を、むくむくと振つて、肩で踊つて、

「わあい。」

と馬鹿調子のどら声を放す。

ひよろ長い美少年が、

「おうい。」

と途轍とてつもない奇声を揚げた。

同時に、うしろ向きの赤い袖ひるがえが翻ひるがえつて、頭目てのひらは掌てのひらを口に当てた、声をおき圧おきえたのではない、
笛を含んだらしい。ヒユウ、ヒユウと響くと、たちまち静しずかに、肅々しずかとして続ついて行く。

すぐに、山の根に取と着ちいた。が草深い雑木の根を、縦に貫く一列は、殿しんがりの尾しんがりの、ずんぐり、ぶつりとした大赤棟蛇おやまかがしが畝うねるようで、あのヘルメットが鎌首しんがりによく似ている。

見る間に、山腹の真黒まっくろな一叢ひとむらの竹藪たけやぶを潜くぐつて隠れた時、

「やーい。」

「おーい。」

ヒユウ、ヒユウと幽かすかに聞こえた。なぜか、その笛に魅かせられて、少年等が、別の世、別の都、別の町、あやしきかくれ里さらへ攫さらわれて行きゆきそううで、悪酒に酔よつたように、凡杯ふさの胸むねは塞ふさつた。

自動車たるべきものが、スピイドを何とした。

茫然ぼうぜんとした状さまして、運転手が、汚れた手袋の指の破れたのを凝じつと視みている。——掌てのひらに、

銀貨が五六枚、キラキラと光つたのであつた。

「——お爺さん、何だろうね。」

「……………」

「私も、運転手も、現に見たんだが。」

「さればなす……………」

と、爺さんは、粉煙草こなたばこを、三度ばかりに火皿の大きなのに撮み入れた。

……………根太の抜けた、荒寺の庫裡くくりに、炉の縁で。…………

三

西明寺さいみやうじ——もとのこの寺は、松平氏が旧領石州から奉搬の伝来で、土地の町村に檀家だんかがない。従つて盆暮のつけ届け、早い話がおとむらい一つない。如法にょほうの貧地で、堂も庫裡も荒れ放題。いずれ旧藩中ばかりの石碑だが、苔こけを剥むかねば、紋も分らぬ。その墓地の凶面と、過去帳は、和尚が大切にしているが、あいにく留守。…………

墓参のよしを聴いて爺さんが言ったのである。

「ほか寺の仏事の手伝いやら托鉢たくはつやらで、こちとら同様、細い煙を立てていなさるでなす。」

あいにく留守だが、そこは雲水、風の加減で、ふわりと帰る事もあるう。

「まあ一服さつせえまし、和尚様とは親類づきあい、渋茶をいれて進ぜますで。」

とにかく、いい人に逢った。爺さんは、旧藩士でもあんなさるかと聞くと、

「孫八とこいて、いやはや、若い時から、やくぎでがしての。縁は異なるもの、はツはツはツ。お前様、曾祖父ひいじいさま様や、祖父様の背戸畑で、落穂を拾った事もあんべい。——鼠ねずみ柵だな

搜いて麦こがしでも進ぜますだ。」

ともなわれて庫裡くらに居る——奥州片原の土地の名も、この荒寺では、鼠柵がふさわしい。いたずらものが勝手に出入りではいをしそうな虫くい柵の上に、さつきから古木魚が一つあった。音も、形も馴染なじみのものだが、仏具だから、俗家の小県は幼いいたずら時にもまだ持つて見たことがない。手頃なのは大抵想像は付くけれども、かこみほとんど二尺、これだけの大きさだと、どのくらい重量めかたがあるうか。普通は、本堂に、香華こうげの花と、香においの匂と明滅する処に、章魚たこあぐら胡坐で構えていて、おどかして言えば、海坊主の坐禅のごとし。……辻の地藏

尊の涎掛よだれかけをはぎ合わせたような蒲団ふとんが敷いてある。ところを、大木魚の下に、ヒヤリと目に涼しい、薄色の、一目見て紛う方まがなき女持ちの提紙ハンドバック入で。白い桔梗ききようと、水紅ときいろの常夏とこなつ、と思つたのが、その二色ふたいろの、花の鉄線つるかずらを刺繡ししゅうした、銀座むきの至極当世な持もので、花はきりりとしているが、葉も蔓も弱々しく、中のもも角ばらず、なよなよと、木魚の下すべりに、優しい女の、帯の端を引伏せられたように見えるのであつた。

はじめ小唄が、この崖を、墓地へ下りる以前に、寺の庫裡のぞを覗いた時、人気ひとけも、火の気もない、炬の傍そばに一段高く破れ落ちた壁の穴の前に、この帯らしいものを見つけて、うつくしい女の、その腰は、袖は、あらわな白い肩は、壁外さかさに逆になつて、蜘蛛くもの巣がらみに、蒼白あおしろくくくられてでもいそうに思つた。

瞬間の幻視である。手提てさげはすぐ分つた。が、この荒寺、思いのほか、陰寂な無人ぶじんの僻地へきちで——頼もう——を我が耳で聞返したほどであつたから。……

私の隣の松さんは、熊野へ参ると、髪結ゆうて、
熊野の道で日が暮れて、

あと見りや怖おそろしい、先見りやこわい。

先の河原で宿取るか、跡の河原で宿取るか。

さきの河原で宿取つて、鯰なますが出て、押えて、

手で取りや可愛いし、足で取りや可愛いし、

杓しやくし子ですくうて、線香せんこうで担になつて、燈心とうしんで括くくつて、

仏様のうしろで、一切ひととき食や、うまし、二切食や、うまし……

紀州の毬まりうた唄で、隠微ざんぎやくな 虐げつの暗示がある。むかし、熊野詣くまのめぐりの山道に行暮れて、古

寺に宿を借りた、若い娘が燈心で括くくつて線香で担になつて、鯰なますを食べたのではない。鯰なますの方が

若い娘を、……あとは言わずとも可よかろう。例証は、遠く、今昔物語、詣鳥部寺女の語はなしに

ある、と小県はかねて聞いていた。

紀州を尋ねるまでもなからう。

……今年はじめて花見に出たら、寺の和尚に抱きとめられて、

高い縁から突落こうがいされて、笄こまぐら落し、小枕落し……

古寺の光景は、異様な衝動で渠かれを打った。

普通、草双紙なり、読本なり、現代一種の伝奇においても、かかる場合には、たまたま

来きたつて、騎士ナイトがかの女を救うべきである。が、こしらえものより毬唄の方が、現実を曝露ばくろ

して、——女は速に虐げられているらしい。

同時に、愛惜の念に堪えない。ものあわれな女が、一切食われ一切食われ、木魚に
圧え挫がれた、……その手提に見入っていたが、腹のすいた狼のように庫裡へ首を突込んで
いて可いものか。何となく、心ゆかしに持っていた折鞆を、縁側ずれに炉の方へ押
入れた。それから、卵塔の草を分けたのであった。——一つは、鞆を提げて墓詣をする
のは、事務を扱うようで気がさしたからであった。

今もある。……木魚の下に、そのままの涼しい夏草と、ちよろはげの鞆とを見較べなが
ら、

「——またその何ですよ。……待つていられては氣忙しいから、帰りは帰りとして、自然
それまでに他の客がなかつたらお世話になろう。——どうせ隙だからいつまでも待とうと
云うのを——そういつてね、一旦運転手に分れた——こっちの町尽頭の、茶店……酒場
か。……ざつとまあ、鯰鮓屋だ。それからは、見た目にも道わるで、無理に自動車を通し
た処で、歩行くより難儀らしいから下りたんですがね——鯰鮓酒場の女給も、女房さんら
しいのも——その赤い一行は、さあ、何だか分らない、と言う。しかし、お小姓に、太刀
のように鉄砲を持たしていれば、大将様だ。大方、魔ものか、変化にでも挨拶に行くの

だろう、と言うんです。

魔ものだの、変化だのに、挨拶は変だ、と思ったが、あとで気がつくど、女連は、うわさのある怪しいことに、恐しく怯えていて、陰でも、退治の、生捉るのは言い憚ったものらしい。がまあ、この辺にそんなものが居るのかね。……運転手は笑っていたが、私は真面目さ。何でも、この山奥に大沼というのがある？……ありますか、お爺さん。」

「あるだ。」

その時、この気軽そうな爺さんが、重たく点頭した。

「……阿武隈川が近いによつて、阿武沼と、勿体つけるで、国々で名高い、湖や、瀉ほど、大いなものではねえだがなす、むかしから、それを逢魔沼と云うほどでの、樹木が森々として凄いでや、めつたに人が行がねえもんだで、山奥々々というだがね。」

と額を暗く俯向いた。が、煙管を落して、門——いや、門も何もない、前通りの草の徑を、向うの原越しに、差覗くがごとく、指をさし、

「あの山を一つ背後へ越した処だで、沢山遠い処ではねえが。」

と言う。

その向う山の頂に、杉檜の森に包まれた、堂、社らしい一地がある。

「……途中でも、気が着いたが。」

水の影でも映りそうに、その空なる樹の間は水色に澄んで青い。

「沼は、あの奥に当るのかね。」

「えへい、まあ、その辺の見当すら。」

と、掌をもじやもじやと振るのが、枯葉が乱れて、その頂の森を掻乱すように見え、

「何かね、その赤い化もの……」

「赤いのが化けものじゃあない——お爺さん。」

「はあ、そうけえ。」

と妙に気の抜けた返事をする。

「……だから、私が——じやあ、その阿武沼、逢魔沼か。そこへ、あの連中は行つたんだ

ろうか、沼には変つた……何か、おそろし可あやし怪い事でもあるのかね。饅飩酒場の女房が、

いいえ、沼には牛鬼が居るとも、おうち大蛇うわさが出るとも、そんな風説は近頃では聞きませんが、

いやな事は、このさきの街道——なわて畷の中にあつた、というんだよ。寺の前を通る道は、古

い水戸街道なんだそうだね。」

「はあ、そうでなす。」

「ぬかるみを目の前にして……さあ、出掛けよう。で、ここへ私^{わが}が来る道だ。何が出よう
 とこの真^ま昼^つ間^{びるま}、気にはしないが、もの好きに、どんな可^お恐^そい事^{ろし}があつたと聞くと、女
 給^{たま}と顔を見合わせてね、旦那^{だんな}、殿方^{だんぱ}には何でもないよ。アハハハと笑つて、陽^お氣^どに怯^{おど}かす
 ……その、その辺を女が通ると、ひとりでに押^お孕^つむ……」

「馬鹿^{ばか}あこけ、あいつ等^ら。」

と額^{ぬか}にびくびくと皺^{しわ}を刻^きみ、瘦^や腕^{せう}を突^つ張^ぱつて、爺^やは、彫^{てい}刻^{こく}のように堅^かくなつたが、

「あツはツはツ。」

唐^だ突^{しぬけ}に笑^{わら}出した。

「あツはツはツ。」

たちまち口にふたをして、

「ここは噴^げ出す処^{ところ}でねえ。麦^{むぎ}こがしが消^け飛^とぶでや、お前^{まへ}様^{さま}もやらつせえ、和尚^{おしょう}様の塩^{しほ}加^か減^{げん}
 が出来^{でき}とるで。」

欠^か茶^{ちや}碗^{わん}にもりつけた麦^{むぎ}こがしを、しきりに前^{まへ}刻^きから、たばせた。が、匙^{さじ}は附^つ木^ぎの燃^もえさし
 である。

「ええ塩^あ梅^{んばい}だ。さあ、やらつせえ、さ。」

搔かい候え、と言うのである。これを思うと、木曾殿の、搔食かわせた無塩ぶえんの平茸ひらたけは、碧へ澗きかんの羹あつものであろう。が、爺さんの竈くど禿はげの針白髪はりしらは、阿倍の遺臣がの概がいがあつた。

「お前様の前だがの、女が通ると、ひとりで孕なむなぞと、うそにも女の身になつたらどうだんべいなす、聞かねえ分で居さつせえまし。優ましげな、情じょうあい合あの深い、旦那、お前様だ。」

「いや、恥かしい、情があるの、何のと言つて。墓詣りは、誰でもする。」

「いや、そればかりではねえ。——知つとるだ。お前様は人間扱いに、畜類ちくにもものを言わしつたろ。」

「畜類ちくに。」

「おお、鷺さぎによ。」

「鷺さぎに。」

「白鷺なわてに。暇なわてさ来る途中でよ。」

「ああ、知つてるのかい、それはどうも。」

——きみ、きみ——

白鷺に向つて声を掛けた。

「人に聞かれたのでは極りが悪いね……」

西明寺を志して来る途中、一処、道端の低い畝に、一叢の緋牡丹が、薄曇る日に燃ゆるがごとく、二輪咲いて、枝の蒼の、撓なのを見た。——奥路に名高い、例の須賀川の牡丹園の花の香が風に伝わるせいかも知れない、汽車から視める、目の下に近い、門、背戸、垣根。遠くは山裾にかくれてた茅屋にも、咲昇る葵を凌いで牡丹を高く見たのであった。が、こんな心易い処に咲いたのには逢わなかつた。またどこにもあるまい。細竹一節の囿もない、酔える艶婦の裸身である。

旅の袖を、直ちに蝶の翼に開いて——狐が憑いたと人さえ見なければ——もつとも四辺に人影もなかつたが——ふわりと飛んで、花を吸おうとも、蒼を抱こうとも、心のままに思われた。

それだのに、十歩……いや、もつと十間ばかり隔たつた処に、銚吉が立停まったのは、花の蒼を、蓑毛に被いだ、舞の烏帽子のように翳して、葉の裏すく水の影に、白鷺が一羽、

婀娜あだに、すつきりと羽を休めていたからである。

ここに一筋の小川が流れる。三尺ばかり、細いが水は清く澄み、瀬は立ちながら、悠揚として、さらさらと聞くほどの音もしない。山入やまいりの水源は深く沈んだ池沼ちしようであろう。湖と言ひ、滝と聞けば、末なごれの流のかくまで静しずかなことはあるまいと思う。たとい地理にしていかなりとも。

——松島の道では、鼓草たんぼほをつむ道草をも、溝を跨またいで越えたと思う。この水は、牡丹むらの叢むらのうしろを流れて、山の根に添つて荒れた麦畑の前を行き、一方は、角つのぐむ蘆あし、茅の芽の漂う水田であつた。

道を挟んで、牡丹と相向う処に、亜鉛トタンと柿こけらの継つぎはぎなのが、ともに腐れ、屋根が落ち、柱の倒れた、以前掛茶屋か、中食ちゆうじきであつたらしい伏屋の残骸ざんがいが、蓬よもぎの裡なかにのめつていた。あるいは、足休めの客の愛想に、道の対むかう側を花畑むしにしていたものかも知れない。流転のあとと、栄花の夢、軒は枯骨のごとく朽ちて、牡丹の膚はだは鮮紅である。

古藁ふるみのが案山子かかしになれば、茶店の骸骨も花守をしていよう。煙は立たぬが、根太を埋めた夏草の露は乾かぬ。その草の中を、あたかも、ひらひら、と、ものの現うつつのように、いま生れたらしい蜻蛉とんぼが、群ぐんじよう青の絹糸に、薄浅葱うすあさぎの結び玉を目にして、綾しろがねの白銀すものの羅

を翼に縫い、ひらひら、と流の方へ、葉うつりを低くして、牡丹に誘われたように、道を伝った。

またあまりに儂い。土に映る影もない。が、その影でさえ、触つたら、毒気でたちまち落ちたろう。—— 暇道の真中に、別に、凄じい虫が居た。

しかも、こつちを、銚吉の方を向いて、髻をぴちぴちと動かす。一疋七八分にして、軀は寸に足りない。けれども、羽に碧緑の艶濃く、赤と黄の斑を飾って、腹に光のある虫だから、留つた土が砥になつて、磨いたように燦然とする。葛上亭長、芫青、地胆、三種合わせた、猛毒、膚に粟すべき斑の中の、最も普通な、みちおしえ、魔の憑いた寶石のように、炫耀と招いていた。

「——こつちを襲つて来るのではない。そこは自然の配剤だね。人が進めば、ひよいと五六尺退つて、そこで、また、おいでおいでをしているんだ。碧緑赤黄の色で誘うのか知らん。」

蜻蛉では勿論ない。それを狙っているらしい。白鷺が、翼を開くまでもなかつた。牡丹の花の影を、きれいな水から、すつと出て、斑の前へ行くと思うと、約束通り、前途へ退つた。人間に対すると、その挙動は同一らしい。……白鷺が再び、すつと進む。

あの歩あしの運びは、小股こまたがきれて、意気に見える。斑いばは、また飛びしきった。白鷺しらぎが道の中を。……

——きみ、——きみ——

「うっかり声を出して呼んだんだよ、つい。……毒虫だ、大毒だ。きみ、嘔くわえてはいけな
いと。あの毒は大変です、その卵のくつついた野菜を食べると、血を吐いて即死だそう
だ。現に、私わたしがね、ただ、触られてかぶれたばかりだが。」

北国ほくごくの秋の祭——十月です。半ば頃、その祭に呼ばれて親類へ行つた。

白山宮はくさんぐうの境内、大きな手水鉢ちようずばちのわきで、人ごみの中だったが、山の方から、颯さつと虫
が来て頬へとまつた。指のさきで払い落したあとが、むずむずと痒かゆいんだね。

御手洗みたらしは清くて冷い、すぐ洗えばだったけれども、神様の助けです。手も清め、口もそ
そぐ。……あの手をいきなり突つっこ込んだらどのくらい人を損そこなつたろう。——たとい殺さない
までもと思うと、今でも身の毛が立つほどだ。ほてって、顔が二つになったほど幅あつた
く重い。やあ、獅子ししのような面つらだ、鬼おにの面めんだ、と小児こどもたちに嘸はやされて、泣いたり怒いかつたり。
それでも遊びにほうけていると、清らかな、上品な、お神巫みこかと思う、色の白い、紅もみの袴かま
のお嬢さんが、祭の露店あまみせに売っている……山葡萄やまぶどうの、黒いほんな紫の実を下すつて——

お帰んなさい、水で冷すのですよ。

——で、駆戻ると、さきの親類では吃驚^{びつくり}して、頭を冷して寝かしたんだがね。客が揃^{そろ}って、おやじ……私の父が来たので、御馳走^{ごちそう}の膳^{ぜん}の並んだ隣へ出て坐った処、そこらを視^みて、しばらくして、内の小僧は？……と聞くんだね。袖の中の子が分らないほど、面^{つら}が鬼になつていたんです。おやじの顔色が変わると、私も泣出した。あとをよくは覚えていないんだが、その山葡萄^{しずく}を雫^{しずく}にして、塗つたり吸つたりして無事に治つた……虫は斑^{まだら} だった事はいうまでもないのです。」

「何と、はあ、おつかねえもんだ、なす。知らねえ虫じゃねえですが、……もつとも、あの、みちおしえは、誰も触らねえ事にしてあるにはあるだよ。」

「だから、つい、声も掛けようではないか。」

「鷺の鳥はどうしただね。」

「お爺さん、それは見ていなかっただかい。」

「なまけもんだ、陽気のよさに、あとはすぐとろとろだ。あの潰^{つぶ}れ屋^{れや}の陰に寝ころばつておつたもんだでの。」

白鷺はやがて羽を開いた。飛ぶと、宙を翔^{かけ}る威力には、とび退^{しき}る虫^{むし}が嘴^{くちばし}に消えた。雪の

蓑毛みのけさわやかを爽さわやかに、もとの流ながれの上に帰つたのは、あと口に水を含んだのであろうも知れない。諸も羽うはねを搏とつと、ひらりと舞上る時、緋牡丹の花の影が、雪の頸うなじに、ぼつと沁しみみて薄うすく紅れないがさした。そのまま山の端はを、高く森の梢こずえにかくれたのであつた。

「あの様子では確たしかに呑んだよ、どうも殺やられたらうと思うがね。」

爺じいは股ももひき引の膝ひざを居直りつて、自信じゆんがありそうに云つた。

「うんや、鳥は伶俐りこうだで。」

「伶俐りこうな鳥でも、殺生石には斃おちるじやないか。」

「うんや、大丈夫でがすべよ。」

「が、見る見るあの白い咽喉のどの赤くなつたのが可おそろし恐いいよ。」

「とろりと旨うまいと酔ようがなす。」

にたにたと笑いながら、

「麦あわこがしでは駄目だだがなす。」

「しかし……」

「お前様、それにの、鷲しゆはの、明神様のおつかわしめだよ、白鷲しゆ明神というだでね。」

「ああ、そうか、あの向うの山のお堂だうだね。」

「余り人の行く処でねえでね。道も大儀だ。」

と、なぜか中を隔てるように、さし覗く小泉の目の前で、頭を振った。

明神の森というところ——あの白鷺はその梢へ飛んだ——なぜか爺が、まだ誰も詣でようとも言わぬものを、悪く遮りだてするらしいのに、反感を持つとまでもなかつたけれども、すぐにも出掛けたい気が起つた。黒塚の婆の納戸で、止むを得ない。

「——時に、和尚さんは、まだなかなか帰りそうに見えないね。とすると、位牌も過去帳も分らない。……」

「何しろ、この荒寺だ、和尚は出がちだよって、大切な物だけは、はい、町の在家の確かな蔵に預けてあるで。」

「また帰途に寄るとしよう。」

不意に立掛けた。が、見掛けた目にも、若い綺麗な人の持ものらしい提紙入に心を曳かれた。またそれだけ、露骨に聞くのが擦つたかつたのを、ここで銚吉が棄鞭を打った。

「お爺さん、お寺には、おかみさん、いや、奥さんか。」

小さな声で、

「おだいこくがおいでかね。」

「は、とんでもねえ、それどころか、檀那だんながねえで、亡者も居ねえ。だがな、またこの和尚が世棄人過ぎた、あんまり悟りすぎた。参詣まげの女衆おなごしゆが、忘れたればとって、預けたればとって、あんだ、あれは。」

と、せきこんで、

「……外廻りをするにして、要心に事を欠いた。木魚をおし圧おしに置くとは何あんたるこんだ。」
と、やけに突つ立つ膝つたがしらに、麦あわこがしの腕うでを炉いろの中へ突つ込んで、ぱつと立つ白い粉こなに、クシンと咽むせたは可笑おかいが、手向たむけの水みづの濁かれたようで、見る目には、ものあわれ。

もくりと、搔落かすように大木魚おほきぎよを膝ひざに取とつて、

「ぼっかり押おっ孕ぼらんだ、しかも大でい、木魚きぎよ講こうを見せつけられて、どんなにか、はい、女衆にょしゆは恥はかしかんべい。」

その時、提紙ひんどバック入いの色いろが、紫陽花あじさいの浅葱あさぎ淡たんく、壁かべの暗くらさに、黒髪くろかみも乱みだれつつ、産婦うぶの顔かほの萎しおれたように見えたのである。

谷間やまの卵塔たまごに、田沢たざわ氏の墓はかのただ一ひと基もと苔こけの払はわれた、それを思おもえ。

「お爺おやさん、では、あの女の持もつものは、お産うぶで死しんだ記念かたみの納おさめものででもあるのかい。」
べそかくばかりに眉まゆを寄よせて、

「牡丹に立つた白鷺になるよりも、人間は娑婆しやばが恋しかんべいに、産で死んで、姑獲鳥うぶめになるわ。びしよびしよ降ふりの闇暗くらやみに、若い女が青ざめて、腰の下さ血だらけで、あのこわれ屋の軒の上へ。……わあ、情なさけない。……お救い下され、南無普門品なむふもんぼん、第二十五。」

と炉縁をずり直つて、たとえば、小県に股引の尻を見せ、向うむきに円うづくまく踞うづくまつたが、古寺の狸などを論ずべき場合でない——およそ、その背中ほどの木魚にしがみついて、もく、もく、もく、もく、と立てつけに鳴らしながら、

「南無普門品第二十五。」

「普門品第二十五。」

小県も、ともに口の裡うちで。

「この寺に觀世音。」

「ああ居らつしやるとも、難ありがた有たい、ありがたい……」

「その本堂に。」

「いや、あちらの棟だ。——ああ、参らつしやるか。」

「参ろうとも。」

「おお、いい事だ、さあ、ごばい、ごばい。」

と抱込んだ木魚を、もく、もくと敲きながら、足腰の頑丈づくりがひよこひよここと前へ立った。この爺さん、どうかしている。

が、導かれて、御廚子の前へ進んでからは——そういう小県が、かえって、どうかしないではいられなくなつたのである。

この庫裡と、わずかに二棟、隔ての戸もない本堂は、置棚の真中に、名号を掛けたばかりで、その外の横縁に、それでも形ばかり階段が残つた。以前は橋廊下で渡つたらしいが、床板の折れ挫げたのを継合せに土に敷いてある。

明神の森が右の峰、左に、卵塔場を谷に見て、よく一人で、と思つてばかり、前刻イんだ、田沢氏の墓はその谷の草がくれ。

向うの階を、木魚が上る。あとへ続くと、須弥壇も仏具も何も無い。白布を蔽うた台に、経机を据えて、その上に黒塗の御廚子があつた。

庫裡の炉の周囲は筵である。ここだけ畳を三畳ほどに、賽銭の箱が小さく据つて、花瓶に雪を装つた一束の卵の花が露を含んで清々しい。根じめともない、三本ほどのチユリツプも、蓮華の水を抽んでた風情があつた。

勿体ないが、その卵の花の房々したのが、おのずから押になつて、御廚子の片扉を支え

たばかり、片扉は、鎧よろいの袖たての断たれたように摺すれ下つていたのだから。

「は、」

ただ伏拝ななめむと、斜さしに差さ覗のぞかせたまうお姿は、御おん丈たけ八寸、雪ゆきなす卯うの花はなに袖そでのひだが靡なびく。白木びつ一彫ひとほり、群青むぎしの御髪みくしにして、一点いっの朱しゆの唇くちほえ、打うち微笑ほほえみつつ、爺おやを、銚しやう吉きちを、見みそなわす。

「南無普門品第二十五。」

「失礼しつれいだけれど、准じゆん胝てい観かん音おんでいらつしやるね。」

「はあい、そうでがすべ。和尚わしやうどのが、覚とえにくい名なを称とえさつしやる。南無普門品第二十五。」

よし、ただ、南無とばかり称とえ申まうせ、ここにおわするは、除災えんみ、延えん命み、求ぐ児うじの誓願せいかん、擁護ようご愛愍あいみんの菩薩ぼさつである。

「お爺さん、ああ、それに、生意氣せんぎをいうようだけれど、これは素晴すばらしい名作めいさくです。私わたしは知らないが、友達ともだちに大分おほい出来る彫刻家てうこくかがあるので、門前かどまへの小僧せうそうだ。少し分わる……それに、よつぼど時代じだいが古い。」

「和尚わしやうに聞きかして下くだつせえ、どないにか喜よろこびますべい、もつとも前ぜん藩主とのさまが、石州いしぢうからお

守りしてござつたとは聞いとりますがの。」

とおよびこし
と及腰のぞに覗のぞいていた。

お蠟燭ろうそくを、というと、爺が庫裡へ調達てうたつに急いだ——ここで濫みだりに火あつかいをさせない注意はもつともな事である——

「たしかに宝物。」

はばか
憚り多いが、靈容れいようの、今度は、作を見ようとして、御廚子ごちうしに寄せた目に、ふと卯の花の白い奥おくに、ものを忍しのばすようにして、供物くもつをした、二つ折の懷紙わいしを視みた。備えたのはビスケットである。これはいささか稚氣ちいきを帯おびた。が、にれぜん河がのほとり、菩提樹ぼだいじゆの蔭かげに、釈尊しやくそんにはじめて捧たげたものは何なにであろう。菩薩ぼさつの壇だんにビスケットも、あるいは臘ろう八はちの粥かゆに増まろうも知しれない。しかしこれを供くえた白い手首てくわいは、野暮やぼなレエスから出でたらしい。勿論もちろんだ。意気いきなばかりが女めでない。同時に芬ぶんと、媚なまめかしい白粉おしろいの薫かおりがした。

爺おやが居いて気がつかつかなかつたか。木魚こぎよを置おいたわきに、三宝さんぼうが据すつて、上に、ここがもし閻魔堂えんまどうだと、女人にょにんを解といた生血なまぢまと膩肉あぶらみに紛まうであらう、生なま々と、滑なまかな、紅白こうはくの巻まいた絹きぬ。

「ああ、誓願せいかんのその一、求児こもと——子育こそだて、子安こやすの觀世音くわんせいおんとして、ここに婦人ふにんの参詣さんぎがある

。に、参り合わせた時の順に、白は男、紅あかは女の子を授けらるる……と信仰する、観世音のたまう腹帯である。

その三宝の端に、薄色の、折目の細い、女扇が、忘れたように載っていた。

正面の格子も閉され、人は誰も居ない……そつと取ると、骨が水晶のように手に冷ひやりとした。卯の花の影が、ちらちらと砂子を散らして、絵も模様も目には留まらぬさきに——
せい……せい、と書いた女文字。

今度は、覚えまぶたず瞼まぶたが染まった。

銚吉には、何を秘かくそう、おなじ名の恋人があつたのである。

五

作者は、小泉銚吉の話すまま、つい釣込まれて、恋人——と受次いだ、大切な処だ。念のため断るが、銚吉には、はやく女房がある。しかり、女房があつて資産がない。女房もちの銭ぜになしが当世色恋の出来ない事は、昔といえども実はあまりかわりはない。

打あけて言えば、渠はただ自分勝手に、惚れているばかりなのである。

また、近頃の色恋は、銀座であろうが、浅草であろうが、山の手新宿のあたりであろうが、つつしみが浅く、たしなみが薄くなり、次第に面の皮が厚くなり、恥が少なくなったから、惚れたというのに憚ることだけは、まずもつてないらしい。

釣の道でも（岡）と称がつくと軽んぜられる。銚吉のも、しかもその岡惚れである。その癖、夥間で評判である。

この岡惚れの対象となつて、江戸育ちだというから、海津か卵であろう、築地辺の川端で迷惑をするのがお誓さんで——実は梅水という牛屋の女中さん。……御新規お一人様、なまで御酒……待った、待った。そ、そんなのじゃ決してない。第一、お客に、むらさきだの、鍋下だのと、符帳でものを食うような、そんなのも決して無い。

梅水は、以前築地一流の本懐石、江戸前の料理人が庖丁を鑪びさせない腕を研いて、吸ものの運びにも女中の裙さばきを睨んだ割烹。震災後も引続き、黒堀の奥深く、竹も樹も静まり返つて客を受けたが、近代のある世態では、篝火船の白魚より、舶来の塩鱒が幅をする。正月飾りに、魚河岸に三個よりなかつたという二尺六寸の海老を、緋緘の鎧のごとく、黒松の樽に緘した一騎駈の商売では軍が危い。家の業が立ちにくい。

がらりと気を替えて、こうべ肉のすき焼、ばた焼、お望み次第に客を呼んで、抱一上人の夕顔を石燈籠の灯でほの見せる数寄屋づくりも、七賢人の本床に立った、松林の大広間も、そのまま、びんちようの火を堆く、ひれの膏をる。

この梅水のお誓は、内の子、娘分であるという。来たのは十三で、震災の時は十四であった。繰返していつでもあるまい——あの炎の中を、主人の家を離れないで、勤め続けた。もつとも孤児同然だとのこと、都にしかるべき身内もない。そのせい、沈んだ陰気な質ではないが、色の、抜けるほど白いのに、どこか寂しい影が映る。膚をいえば、きめが細く、実際、手首、指の尖まで化粧をしたように滑らかに美しい。細面で、目は、ぱっちりりと、大きくないが張があつて、そして眉が優しい。緊つた口許が、莞爾する時ちよつとうけ口のようになつて、その清い唇の左へ軽く上るのが、笑顔ながら凜とする。総てが薄手で、あり余る髪の厚ぼつたく見えないのは、癖がなく、細く、なよなよとしているのである。緋も紅も似合うものを、浅葱だの、白の手絡だの、いつも淡泊した円鬘で、年紀は三十を一つ出た。が、二十四五の上には見えない。一度五月の節句に、催しの仮装の時、水髪の芸子島田に、青い新葉で、五尺の菖蒲の裳を曳いた姿を見たものがある、と聞く。……貴殿はいい月日の下に生れたな、と言わねばならぬように思う。あるいは一

度新橋からお酌で出たのが、都合で、梅水にかわつたともいうが、いまにおいては審つまびらでない。ただ不思議なのは、さばかりの容きりよう色で、その年まで、いまだ浮気、あらわに言えば、旦那があつたうわさを聞かぬ。ほかは知らない、あのすなおな細い鼻と、口許がうそを言わぬ。——お誓さんは処女だろう……（しばらく）——これは小県銚吉の言うところである。

十六か七の時、ただ一度——場所は築地だ、家は懷石、人も多いに、台所から出入りの牛乳屋ちちやの小僧が附ぶみをした事のあるのを、最も古くから、お誓を鼻ひいき根の年配者、あたまのきれいに兀はげた粹人が知っている。梅水の主人夫婦も、座興のように話をする。ゆらの戸の歌ではなければ、この恋の行方は分らない。が、対あいて手が牛乳屋の小僧だけに、天使と牧童のお伽とぎばなし話を聞く気がする。ただその玉章たまずさは、お誓の内ないしよ証の針箱にいまも秘めてあるらしい。……

「……一生の願ねがいに、見たいものですな。」

「お見せしましょうか。」

「恐らく不老長寿の薬になる——近頃はやる、性の補強剤に効能の増まること万々だろう。」

「それでしょうか。」

その頬が、白く、涼しい。

「見せろよ。」

低い声の澄んだ調子で、

「ほほほ。」

と莞爾にっこり。

その口許の左へ軽くしまるのを見るがいい。……座敷へ持出さないことは言うまでもない。

色気の有無ほどが不可解である。ある種のうつくしいものは、神が惜おしんで人に与えない説がある。なるほどそういえば、一方円満柔和な婦人に、菩薩相ぼさつそうというのがある。続いて尼僧顔がないでもあるまい。それに対して、お誓の処女づくつて、血の清澄せいしやうめい明晰せきな風情に、何となく上等の神巫みこの麗女たおやめの面影が立つ。

——われ知らず、銚吉のかくれた意識に、おのずから、毒虫の毒から救われた、うつくしい神巫おみこの影が映るのであろう。——

おお美わしのおとめよ、と賽銭さいせんに、二百金、現に三百金ほどを包んで、袖ていに呈するものさえある。が、お誓はいつも、そのままお帳場へ持つて下つて、おかみさんの前で、こ

んなもの。すぐ、おかみさんが、つツと出て、お給仕料は、お極きまりだけ御勘定の中に頂いてありますから。……これでは、玉の手を握ろう、紅もみの袴はかまを引こうと、乗出し、泳上る自信やからこうべの頭あたまを、幣結してゆうた榊さかきをもつて、そのあしきを払うようなものである。

いわんや、銚吉のごとき、お月掛うづこなみの氏子うぢこをや。

その志を、あわれむ男が、いくらか思おもいを通とほわせてやろうという気で。……

「小県の惚れ方は大変だよ。」

「……………」

「嬉しいだろう。」

「ええ。」

目で、ツンと澄まして、うけ口をちよつとしめて、莞爾にっこり……

「嬉しいですわ。」

しかも、銚吉が同座で居た。

余計な事だが——一説がある。お誓はうまれが東京だというのに「嬉しいですわ。」はおかしい。この言葉づかいは、銀座あるきの紳士、学生、もっぱら映画の弁士などが、わざと粋がって「避暑に行つたです。」「アルプスへ上るです。」と使用するが、元来は訛なまり

である。恋われて——いやな言葉づかいだが——挨拶あいさつをするのに、「嬉しいですわ。」は、嬉しくない、と言うのである。

紳士、学生、あえて映画の弁士とは限らない。梅水の主人は趣味が遍あまねく、客が八方に広いから、多方面の芸術家、画家、彫刻家、医、文、法、理工の学士、博士、俳優、いづれの道にも、知名の人物が少くない。揃った事は、婦人科、小児科、齒科もある。申しおくれしました、作家、劇作家も勿論ある。そこで、この面々が、年齢の老若にかかわらず、東京ばかりではない。のみならず、ことさらに、江戸がるのを毛嫌いして「そうです。」
「のむです。」を行やる名士が少くない。純情無垢むくな素質であるほど、ついその訛なまりがお誓ちかにうつる。

浅草寺の天井の絵の天人が、蓮華たらいの盥たらいで、肌脱むくぎの化粧をしながら、「こウ雲助どう、こんたア、きよう下界へでさつしやるなら、京橋の仙女香を、とって来ておくんなんし、これサ乙女や、なによウふざけるのだ、きりきりきようでえをだしておかねえか。」（〇註に、けわい坂ざか——実は吉原——近所だけか、おかしなことばが、うつつていたまう、）と洒落しやれつつ敬意を表した、著作の実例がある。遺憾いかんながら「嬉しいですわ。」とはかいてない。けれども、その趣はわかると思う。またそれよりも、真珠の首飾見たようなもの

を、ちよつと、脇の下へずらして、乳首をかくした膚を、お望みの方は、文政壬辰新板、柳亭種彦作、歌川国貞画——奇妙頂礼地蔵の道行——を、ご一覧になるがいい。通り一遍の客ではなく、梅水の馴染で、昔からの鼻肩連が、六七十人、多い時は百人に余る大一座で、すき焼で、心置かず隔てのない月並の会……というつと、俳人には禁句らしいが、そこらは凡杯で悟っているから、一向に頓着しない。先輩、また友達に誘われた新参で。……やつと一昨年の秋頃だから、まだ馴染も重ならないのに、のつけから岡惚れした。

「お誓さん。」

「誓ちゃん。」

「よう、誓の字。」

いや、どうも引手あまたで。大連が一台ずつ、黒塗り真円な大円卓を、ぐるりと輪形に陣取つて、清正公には極内だけれども、これを蛇の目の陣と称え、すきを取つて平らげること、焼山越の蟒蛇の比にあらず、朝鮮蔚山の敵軍へ、大砲を打込むばかり、油の黒煙を立てる裡で、お誓を呼立つること、矢叫びに相斉しい。名を知らぬものまで、白く咲いて楚々とした花には騒ぐ。

巨匠にして、超人と称えらるる、ある洋画家が、わが、名によって、お誓をひき寄せ、
 銚吉を傍かたわらにして、

「お誓さんに是非というのだ、この人に酌をしておあげなさい。」

「はい。」

が、また娘分に仕立てられても、奉公人の謙讓があつて、出過ぎた酒場バアの給仕とは心得
 が違うし、おなじ勤めでも、芸者より一步退さがつて可憐しおらしい。

「はい、お酌……」

「感謝します、本懐であります。」

景物なしの地位ぐらいに、匂が抜けたほど、嬉しがつたうちはいい。

少し心安くなると、蛇の目の陣おそれに恐をなし、山の端はの霧に落ちて行く——上じょうろう 藤のよ
 うな 優やさす 姿すがたに、野声のこえを放つて、

「お誓さん、お誓さん。姉さん、姐あねご、大姐ご。」

立てごかしに、手繰りよせると、酔つた赤づらの目が、とろんこで、

「お酌を頼む。是非一つ。」

このねだりものの浣猴わゆる、魔界の艶夫人に、芭蕉扇を、貸さずば、奪わむ、とする擬勢

を頭あわす。……博識にしてお心得のある方々は、この趣を、希臘ギリシア、羅馬ローマの神話、印度の譬諭ひゆきよう經にでもお求めありたい。ここでは手近な絵本西遊記で埒らちをあける。が、ただ先哲、孫呉空は、蟪蛄ごまむしと変じて、夫人の腹中に飛び込んで、痛快にその臟腑ぞうぷを抉えぐるのである。末法の凡俳は、咽喉のどまでも行かない、唇に触れたら酸漿ほおずきの核たねともならず、溶とろけちまおう。ついでに、おかしな話がある。六七人と銚吉がこの近所の名代の天麩羅てんぷらで、したたかに食い且つ飲んで、腹こなしに、そろそろと歩行あるき出して、つい梅水の長く続いた黒塀くろべいに通りがかった。

盛り場でも燈ともを沈しむめ、塀の中は植込しんで森と暗い。処で、相談を掛けてみたとか、掛けてみるまでもなかつたとかいう。……天麩羅のあとで、ヒレの大切れのすき焼は、なかなか、幕下でも、前頭でも、番附か逸話に名の出るほどの人物でなくてはあしらい兼ねる。素通りをすることになった。遺憾いげんさに、内は広し、座敷は多し、程は遠い……

「お誓さん。」

黒塀を——惚れた女に洋杖ステッキは当てられない——斜ななめに、トンと腕で当てた。当てると、そのまくれた二の腕に、お誓の膚はだが透通まっしろうつて、真白に見えたというのである。

銚吉の馬鹿を表わすより、これには、お誓の容色の趣を俛しのばせるものがあるであろう。

ざつと、かくの次第であつた処——好事魔多しというではなけれど、右の澆^{わるざる}猴^{さる}は、心さわがしく、性急だから、人さきに会^{あひ}に出掛^いけて、ひとつ蛇の目を取巻くのに、度^{たび}かさなるに従つて、自然とおなじ顔が集るが、星座のこの分野に當つては、すなわち夜^よ這^{ばい}星^{ぼし}が真^ま先^{つさき}に出向^いいて、どこの会でも、大抵^{ひともしごろ}点燈^{てんとう}頃^{ころ}が寸法であるのに、いつも暮^くま^え早^{はや}くから大広間の天井下に、一つ光つて……いや、光らずに、ぼつんと黒く、流れている。

勿論、ここへお誓^{ちか}が、天女の装^{よそおい}で、雲に白足袋^{しろあしぶき}で出て来るような待遇では決してない。

その愚劣^{あわれ}さを憐^{あわれ}んで、この分野の客星^{きやくせい}たちは、他^{ほか}より早く、輝^あいて頭^{あたま}られる。輝^あくばかりで、やがて他の大一座^{たいいつざ}が酒池肉林^{しゅちじくりん}となつても、ここばかりは、疊^{わらび}に蕨^{わらび}が生^うえそうに見える。通りかかつた女中に催促^{そそ}すると、は、とばかりで、それきり、寄りつかぬ。中でも活潑^{かつせき}なのは、お誓^{ちか}さんでなくつてはねえ、ビーと外^{そと}れてしまう。またそのお誓^{ちか}はお誓^{ちか}で、まず、ほかほかへ皿^{はし}小鉢^{せうぱち}、鉢^{ちようし}子^しを運^こぶと、お門^{かど}が違^{ちが}いましたよう。で、知りませんと、鼻をつまらせ加減^{かへん}に、含^{はにか}羞^かんで、ついでと退^のくが、そのままでは夜^よ這^{ばい}星^{ぼし}の方^{かた}へ来^きにくくなつて、どこへか隠^{かく}れる。ついでお鉢^{はち}子^しが遅^{おそ}くなつて、巻煙草^{まきせんそう}の吸殻^{くがら}ばかりが堆^{うずたか}い。

何となく、ために気がとがめて、というのが、会^{あひ}が月の末^{すえ}に當^あるので、懐^{ふとこころ}中^{ちゆう}勘定^{かんと}によつたかも分^わらぬ。一度、二度と間^まを置^おくうち、去年七月^{こぞしちがつ}の末^{すえ}から、梅水^{うめみづ}が……これも近頃

各所で行われる……近くは鎌倉、熱海。また軽井沢などへ夏季の出店でみせをする。いやどこも不景気で、大したほまちにはならないそうだけれど、差引一ぱいに行けば、家族が、一夏避暑をする儲けがある。梅水は富士の裾野すその——御殿場へ出張した。

そこへ、お誓が手伝いに出向いたと聞いて、がっかりして、峰は白雪、麓ふもとは霞だろう、とそのまま夜這星の流れで消えたのが——もう一度いおう——去年の七月の末頃であつた。この、六月——いまに至るまで、それ切り、その消息を知らなかつたのである。

もし梅水の出店をしたのが、近い処は、房総地方、あるいは軽井沢、日光——塩原ならばいうまでもない。地の利によらないことは、それが木曾路でも、ふとすると、こんな処で、どうした拍子、何かの縁で、おなじ人に、逢うまじきものでもない、と思つたらう。

仏蘭西フランスの港で顔を見たより、瑞スウィツツル西の山で出会つたのより、思掛けなさはあまりであつたが——ここに古寺の觀世音の前に、紅白の絹に添えた扇子おうぎの名は、築地の黒塀を隔てた時のようではない。まのあたりその人に逢つたやうで、単衣ひとえの袖も寒いほど、しみじみと、熟じつと視みた。

たちまち、炬たいまつのごとく燃ゆる、おもほてりを激しく感じた。

爺さんが、庫裡くくりから取つて来た、燈明の火が、ちらちらと、

「やあ、見るもんじゃねえ。」

その、扇子を引つたくと、

「あなたよ、こんなものを置いとくだ。」

と叱るようにいって、開いたまま、その薄色の扇子で、木魚を伏せた。

極きまりも悪いし、叱られたわんぱくが、ふてたように、わざとらしく祝していった。

「上へのつけられたより、扇で木魚を伏せた方が、女が勝つたようで嬉しいよ。」

「勝つも負けるも、女は受身だ。隠すにも隠されましねえ。」

どかりと尻をつくと、鼻をすすって、しくしくと泣出した。

青い煙の細くなびく、蠟燭の香の沁しむ裡なかに、さつきから打ちかさねて、ものの様子が、

思わぬかくし事に懐妊かいにんしたか、また産後か、おせい、といううつくしい女一人、はかな

くなつたか、煩ろうて死のうとするか、そのいずれか、とフト胸がせまって、涙ぐんだ目

を、たちまち血の電光のごとく射たのは、林間の自動車に闖ちんにゆう入した、五体個々にして、

しかも畝うねり繋つながった赤色の夜叉やしやである。渠等かれらこそ、山を貫き、谷うがを穿うつて、うつくしい犠牲

を獵からん。飛天の銃は、あの、清く美しい白鷺を狙うらしく想われるとともに、激毒を

啣ぶくんだ靈鳥は、渠等に対していかなる防禦をするであろう、神話のごとき戦は、今日の中うちにも開かるるであろう。明神の晴れたる森は、たちまち黒雲に蔽おほわれるるであろうも知れない。

銚吉は、少からず、獵奇の心に駆られたのである。

同時にお誓ちかがうつくしき鳥と、おなじ境遇に置かるるもののように、衝つと胸を打たれて、ぞつとした。その時、小枝が揺れて、卯の花が、しろじろと、細く白い手のように、銚吉の膝すねに縋すがつた。

昭和八（一九三三）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成9」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年6月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十三卷」岩波書店

1942（昭和17）年6月22日発行

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2006年3月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

燈明之卷

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>